

カシャッ。

シャッター音に合わせ、僕はシャツの裾を摘まんだ。

「もう少し上げろ」

「これくらいですか？」

「腹だけ見せろ。視線はこっち」

顎を引き、正面のレンズを見る。白いスタジオの中央にいるのは僕一人だった。けれど、三台のカメラと大型モニター、それから三人のスタッフの視線が、身体の隅々まで追っている。僕は男性として活動している、成人向けのカントボーイモデルだ。女性器があることは仕事でも隠していない。その特徴を売りにした下着や衣装の撮影も、これまで何度も受けてきた。

ただし、完全なヌードだけは一度もない。今日も聞いていたのは、薄手のシャツと下着を使った成人向け写真集の宣伝撮影だった。

（これがうまくいけば、表紙にも使ってもらえるかもしれない）

モデルとしては、今まででいちばん大きな仕事だ。

「次、シャツを肩まで落とせ」

撮影監督兼カメラマンの黒木彰が、ファインダー越しに命じる。シャツの襟をずらし、片方の肩を出す。

カシャッ。カシャッ。

「……違う」

黒木さんがカメラを下ろした。

「すみません。表情ですか？」

「全部だ」

短い答えに、スタジオが静かになる。スタイリス

トの佐伯直人は衣装ラックの前で手を止めた。照明と編集を兼ねる橘悠真も、モニターへ身を寄せる。画面には、さっきまで撮った僕の写真が並んでいた。胸元を開いたもの。下着の紐へ指を掛けたもの。ベッドを模したセットへ横たわり、唇を薄く開いたものの。

どれも指示どおりに撮ったはずだった。

「綺麗には撮れてるよ」

橘さんが画像を拡大する。

「でも、成人向けの表紙にするには綺麗すぎるかな」

「欲情がない」

黒木さんの指が、モニターの中の僕の顔を叩いた。

「服を脱ぎかけているだけだ。続きを見たいと思わせる顔になっていない」

（失敗した……？）

今日のために、鏡の前で何度も表情を練習した。
けれど、現場で必要とされるものには届いていなかったらしい。

「もう一度、お願いします」

「同じ衣装で続けても変わらない」

黒木さんがカメラの設定を変えながら言った。

「企画を変える。ここからヌードで撮る」

「……ヌード？」

「全部脱げ。服で隠すから、表情まで守りに入る」

「でも、今日は下着までって……」

「急な変更なのは分かっています」

佐伯さんが静かに口を挟む。

「無理にとは言いません。ただ、今日の素材で表紙候補を作るなら、黒木さんの判断は正しいと思います」

橘さんが、モニターに企画書を出した。全国展開。特集ページ。駅前の大型広告。僕の名前が、候補モデルとして大きく表示されている。

「ヌードまで撮れたら、使える媒体が増えるよ。顔と名前を覚えてもらうには、かなり大きい仕事になる」

断れば、今まで撮った写真だけで選考される。黒木さんが納得していない写真で。

（初めてだけど……ここで逃げたら、次はないかもしれない）

手の中で、シャツの裾が皺になった。

「顔も、出ますか」

「出す。お前の名前で売る写真だ」

「撮ったものは、今日の企画以外には使わないでください」

「契約範囲は守る」

怖くないわけではない。でも、これは仕事だ。僕が選んだ仕事で、大きな機会でもある。

「……分かりました」

息を整え、シャツのボタンへ指を掛ける。

「やります。ヌードで、撮ってください」

「決まりだ。佐伯、準備しろ」

「はい」

佐伯さんから薄い黒のローブを渡され、衝立の裏へ入る。シャツを脱ぐ。下着へ指を掛けたところで、動きが止まった。

（本当に、全部……）

今まで布越しには何度も撮られた。それでも、割

れ目まで直接レンズへ晒したことはない。

「湊。時間を使うな」

「はい」

覚悟を決めて下着を下ろした。ローブを羽織り、前を強く合わせる。たった一枚なのに、これを脱いだら戻れない気がした。衝立から出ると、スタジオの配置が変わっていた。白い背景紙の中央には低いベンチが置かれ、その背後には、腕を上げた姿勢で支えるための横木が取り付けられている。正面と左右にはカメラがあり、大型モニターには、すでに三分割の撮影画面が開いていた。

橘さんが照明を一灯ずつ点けた。

「中央へ」

黒木さんに促され、床の印まで歩く。

「ローブを取りますね」

佐伯さんが背後へ立つ。

「自分で脱げます」

「裾を踏むと危険ですから」

肩へ掛かった布を、後ろからゆっくり引かれる。
胸が出る。腹が出る。最後に、脚のあいだまで何も
隠すものがなくなった。ローブが完全に離れた瞬間、
反射的に両手を下ろす。

「隠すな」

「すみません……」

「腕は横へ。脚を肩幅に開けろ」

言われたとおりにする。

カシャッ♡

初めて裸を撮られた。胸の奥が跳ね、息が止まる。

「今の顔は悪くない♡」

撮影の空気が変わった合図のように、黒木さんの命令が妙に甘く響いた。

カシャッ♡ カシャッ♡

「正面♡ 次は腰を少し捻れ♡」

「こ、こうですか♡」

「脚を閉じるな♡ 割れ目が隠れる♡」

「はい……♡」

モニターの中に、裸の僕が大きく映っている。胸も、腹も、脚のあいだも、拡大すれば細かなところまで見えてしまう。

（仕事だから……ちゃんと、見せないと）

震えそうになる膝へ力を入れ、指示された角度を作る。

カシャッ♡ カシャッ♡ カシャッ♡

「ベンチへ座れ♡」

腰を下ろすと、佐伯さんが両膝へ手を添えた。

「もう少し開きますね♡」

「自分でできます♡」

「画角へ合わせるだけです♡」

膝を左右へ広げられ、脚のあいだが正面のレンズへ向いた。

カシャッ♡

「やっ♡ あの、近すぎませんか♡」

「寄りも必要だ♡」

黒木さんがカメラを低い位置へ移す。

「手を頭の後ろへ♡ 胸を張れ♡」

両腕を上げる。胸が前へ出て、開いた脚のあいだを隠せなくなる。

カシャッ♡ カシャッ♡